『情報リテラシーⅠ』84号　1996.5.31.発行　pp.10-29　(財)情報処理教育研修助成財団
1996-34

座　談　会

## 情報を読み解く力

# 現代社会のリテラシー

**野々垣元氏**（富士通アプリコ㈱ マルチメディア事業部長）
**井上輝子氏**（和光大学人間関係学部教授）
**橋爪大三郎氏**（東京工業大学大学院 価値システム専攻教授）

**司会**　情報リテラシーは、いま話題の言葉の一つでございますが、そのわりに、それがどういう言葉なのか、どういう意味を持つかということが伝わっていないように思われます。今日は情報リテラシーは何なのかという基本的な問題についてお話いただきたいと思います。平たい言い方をすれば、古代には古代の、中世には中世の、近世、近代、また現代にはそれなりの情報リテラシーがあり、時代とともに情報リテラシーも変化した。それが現代、とくにコンピュータの発達によって著しく変化したところに今日の問題があると思います。

それぞれの時代の情報リテラシーがどういうものであったかという基本的な部分から始めまして、未来にどういう展望があるのかを語っていただきたいと思います。

どうぞご自由にお話しになりたいところからお話しいただけたらと思います。

井上先生は学校で情報リテラシーという講座をお持ちだそうですので、口火を切っていただけますか。

**井上**　去年、「メディア・リテラシー」というテーマで一年生向けのゼミをやっただけなので、いまおっしゃったような情報処理教育についてはよくわかりません。コンピュータの類も全くいじれないので、今日は勉強のつもりで伺いました。



## 発信側により問題があるメディア・リテラシー

それで、メディア・リテラシーというところから話を始めて、情報ということとどういうふうに繋がるのか、ちょっと考えてみたいと思います。先ほど申しましたように、私は授業でもメディア・リテラシーを取り上げていますし、今、メディア研究をしている人びとの間で、メディア・リテラシーへの関心はかなり高まってきていると思います。それはどういうことかといいますと、特にマスメディアの場合、情報がいわば一方通行で流されているわけですが、そこにさまざまな偏りとか問題があるわけです。メディアが流す情報を一方的に受け取るのではなくて、むしろ受け取る側が積極的に読み解いて、それを批判をしたり、あるいは自分のものとして活用していく、そういう力をつけていくことがいま一番必要なのではないかということです。以前から、私たちはメディアの表現内容に問題がある、特に女性の観点から見たときに、メディアの表現は非常に性差別的な要素を持っていたり、偏っているということで、それを批判することを中心的な課題にしてきました。

そのメディアの表現をつくっていくメディアの組織をも問題にしてきたわけです。しかし、メディアは必ずしも一方通行で操作するというものではないし、受け取る側が白紙状態でそれを全面的に受け入れるというわけでもありませんから、受け手というよりはむしろ使い手ないし読み手として、受信側が積極的に働きかけていく、そういうところを重視したり、あるいはその力を開発していくことが重要だということで、メディア・リテラシーという考え方がしばらく前から出てきました。メディアを批判的に読み解く力をつけることが重視されてきたわけですね。そういう意味ではマスメディアに限らず、他のさまざまなメディアあるいは、メディアを使わない情報もそうなんだと思いますけれども、発信者が発信したことを受信者はどのように受け取るのか、そして受け取ることによって受信者が発信者になっていくという、そういう回路をつくっていくことがいま必要なんだと思うのです。そういう意味では、メディア・リテラシーの概念をもう少し広げて、情報リテラシーという捉え方になっていくのかなと思います。

## いまはコンピュータリテラシーの時代

**橋爪**　リテラシーとは何かと言えば、昔は文字通りに字が読めることを意味しました。文字はあとからできたものなんですね。最初に言葉があって、言葉は誰でも喋れるわけです。けれど、字ができてからは、字が読めて言葉を使う人と、字が読めないで言葉を使う人との間に知識のギャップが起きてきた。古代、中世、近代を通じてずっと、そのギャップの上に社会生活が組み立てられてきた。それで、字が読める人を増やしましょうというのが産業社会で、リテラシーが問題にされてきたという動きがあるんですね。

わが国の場合、読み書きはだいたいある程度のところまで行ったわけですけれども、ここで新しく起こってきた問題がコンピュータで、コンピュータは情報処理、言語を処理する機械なわけです。そこでワープロが八〇年代から普及して、それから最近は「ウィンドウズ」に代表されるような、パソコンのブームが起こりました。ここでコンピュータを使っていろいろなことをする人と、しない人という、二種類の人間ができかかっている。これが昔、字が読める人と読めない人との違いと似ている部分があるというので、情報リテラシーと言うのだと思いますけど、狭い意味ではコンピュータ・リテラシーなんですね。

文字の場合との類比で考えれば、では、コンピュータもみんなできるようになりましょ

井上輝子氏

う、というのが情報リテラシーの問題で、それで話は終わりなんですけれど、果たしてそういう問題なのか。そのへんの問題をいろいろ議論していくというのが今日の目的じゃないかなと思っています。

**司会**　コンピュータの問題に入ります前に、ちょうどいまもテレビの報道機関が問題になっていますけれども、あれも広い意味でのリテラシーの問題のような気がしますね。発信のほうがどんどん発達しているのに対して、受信者側がいままであまりにも愚民となっていた中で発生してきた問題であるような気もいたしますし。

**井上**　今日は情報リテラシーをテーマにお話しするということで、私が一番お話しようと思ってきたのは、その問題です。メディアの側が、または、厚生省とかいったお役所もそうなんですけれども、そういうところがある種の情報を持っていて、さまざまな影響力を行使する活動をしているわけですけれど、それが一般の市民というか、視聴者、読者には情報が公開されてない、つまり情報があっても情報に手が届かない状況があります。情報にアクセスできる力というのも、一つの情報リテラシーじゃないかと思うのです。いままで〇〇リテラシーということで考えてきた、いわば受け手なり読み手なりの側が読む力を身につけるという、そういうことだけではすまないという問題です。受け手の側に情報を公開していく、発信者の側がたとえ発信したくないことでも要求があれば見せていく仕組みがないことには、本当の意味でリテラシーは獲得できないんじゃないかと思うのです。

　私たちは今までリテラシーの問題を考えるとき、どちらかというと教育の面から、個々人がとにかくリテラシーを身につけるべきだという、そっちの発想でだけ考えてきたような気がするんです。けれど、そうではなくて、リテラシーを獲得できるためにも発信者の側のあり方を変えていくということがいま重要だと考えます。

## リテラシーと情報公開は車の両輪

**橋爪**　情報公開の問題はリテラシーと隣り合っている問題だと思います。リテラシーは、目の前に情報がありながら、情報に触れるチャンスがありながら、自分の能力の問題でそれを活かし切ることができない。これがリテラシーの問題だと思います。あくまでも、自分に責任があるんですね。

　いっぽう、情報公開の問題は、情報が目の前にないわけです。本来出てきてもよいはずの情報が、情報を持っている人の手によって隠されてしまっている。「だから、それを開示してください、私はその情報を知る権利があります」。知る権利、情報公開の問題は、リテラシーと隣り合っていて、両方がないと情報が手に入らないのです。

　では、その目的は何か。それは、正確で、十分自分の役に立つ世界についての像を獲得することにある。リテラシーがなくてもだめだし、それから情報公開がなくてもだめだし、その両方がそなわる必要がある。そういう意味で結びついている、けれども独立のことだと思います。

　で、リテラシーの問題が重要なのは、リテラシーがそなわっていないと、情報公開がなされていないために自分の世界が正しく構成できないのかどうか検証できないわけです。リテラシーが十分高まってきたときに初めて、誰かが情報を隠しているなという、相手の責



任が明確になってくる。そういうふうに、この二つは絡み合っています。

**井上**　しかしまた、情報がある程度知らされていないと、隠されているということ自体を気がつくこともできないということもありますよね。

**橋爪**　隠しているらしいと気がつくのは、これはどういう能力なんでしょうね（笑）。

**井上**　そうですね。かなり相互関係がありますね。リテラシーがあれば即ち隠してることに気がつく、というふうにもストレートにいかないような気がしますね。

**橋爪**　少なくとも、気がつきやすい。

**井上**　はい、気がつきやすいけれど、またちょっとでも情報がないと、いくらこちらに能力があっても気がつかないということもあるような気がします。だから、両方絡み合っている問題ですね。

**司会**　もう一つ、たとえば読み書きができないということは自分が自覚できる症状ですけど、いまのように新聞でもテレビでもたくさんの情報が発信されていて、それに対して本当の意味のリテラシーが自分の中にないということが個々人に自覚されてないという、そういう恐ろしさもあるような気がするんですが、そのへんはいかがでしょうか。コンピュータの場合などは非常に明確に、第一にハードウェアがなければだめなわけですけれども。ちょっと話が広がりすぎるかもしれませんけれども、私どもがこの問題を考えていく一番根源的な態度として、そのへんをまず明確にしたいと思います。

**橋爪**　情報リテラシーがなくても気がつかないと思いますよ、たぶん。というのは、字のことになぞらえていえば、もともと字はなかったわけですから、それで何不自由なく生活は送れていたわけです。ですから、自分は字が読めないんだということに気がつくのはちょっと努力、工夫が必要です。字が読めるとこんなにいいことがあるんだということを、手近の誰かが能力として獲得していないと、それはわからない。

　情報リテラシーの場合も同じで、自分でいままで通り生活している分には、自分がそういう能力を獲得していないんだということはなかなかわからないと思います。けれど、能力を獲得した人が身近にいて、具体的に知って、そしてこんなことができる、あんなことができるというふうに見聞きすれば、翻って自分はどうなんだろう、このままじゃいけない、という感覚になるんじゃないでしょうか。そのことに関しての教育というか、一種の刺戟を与えることが必要ですね。

**井上**　確かに、身近にリテラシーのある人がいるということは重要ですね。また、ある問題についてある所に情報があるのだということを知っていることも役に立ちますね。

　同時に、自分が問題に直面すると気がつく、つまり必要に迫られると、このことについて知りたいとか、あるいは知るためにはこういう力が必要だとかということに、気がついていくと思うのです。

　だから、自分の生活の中での情報への切実感というか、必要性というか、そういうこともやはりきっかけになると思います。何事もなく自分の生活に満足している場合には、特に新しいリテラシーの必要性、あるいは新しい情報の必要性を感じないですんでしまいますよね。こうした問題に対する感受性というか、または本当に切迫した状況というか、そういうものが情報への欲求を生み出すような気がします。

## 個人の能力が問題か　国家・社会の要求が重要か

**野々垣**　リテラシーといったときに、先ほど橋爪先生がおっしゃったようなお話で、近代国家が大きくなっていくときに必然的に必要としたという、そういう意味でのリテラシーを情報リテラシーと同じように考えるのかどうかをまず議論をしないといけないような気

橋爪大三郎氏

がするんです。つまり、個人の能力だけを議論してる間は、いろいろな観点が出てきますけれども、収束しないと思うのですね。ですから、国の政策なり、共通な基盤として、そういう教育をやっていく必要があるのか、ないし、そういう情報というものが社会のベースになって、誰でもが普通に享受できるようになった暁に、さらにそこに教育が必要なのかということです。

先ほどの話では、そういう中に隠蔽されているものをどうやって取り出すか。つまり、情報そのものではなくて、そこに隠されてる闇の部分みたいなものをどう取り出すかとか、そういうことのほうが重要なのかもしれない。でも、とかく情報リテラシーという言葉を使ってしまうと、情報をどう消化するかということに議論が行ってしまうような気がするんですね。ですから、まず個人の能力ということを議論するのか、そうではなくて、非常に大きな文教的な政策なり、国のあり方なり、そういうことの議論をするのか、議論をきちっと分けてやったほうが、明快な形になるように思うのですね。

## リテラシーを促進するのは便利性と収益性

**橋爪**　それも大事なポイントだと思うんですけれど、ちょっと話を戻せば、情報リテラシーの場合、あるモノが使えるということと非常に近い部分があると思うのですね。私の母親などは銀行のキャッシュディスペンサーを使えません。まあ、年のせいもあるんですけれども、お金がボタンやカードで出てくるということは、たいへん気持ちが悪い、ということで使わないわけです。ですから、昔のように十五分待たないと現金が手に入らないわけです。それでべつにいいわけです。昔から銀行はそうだったわけですから。しかし、それですと、たとえば土曜日、日曜日に現金が必要になった場合、手に入りませんね。で、若い人はそういう便利さに敏感ですから、カードで現金を引き出すぐらい当たり前なんですね。やはりそこに世代ギャップといいますか、要求されている社会生活のベースが変化してるという事情があるわけです。簡単にいうとこれは、便利ということです。便利であれば誰でもわかりますから、リテラシーは普及していくわけです。

もう一つは、儲かるということじゃないかと思います。たとえばインターネットを使って海外のブランドを個人輸入できるとします。間にマージンが入りませんから、同じシャネルのバッグとか何かが半分か三分の一の値段で買えたとします。そうすると（それぐらいの差額があれば、インターネットと接続ぐらいたぶんできちゃう時代になっていると思いますので）、隣の奥さんがいいバッグを持っていると、どうやって買ったのか。あ、そんなに安かったのか、私もほしいとなれば、たちまち普及するんじゃないでしょうか。

だから、便利であり、しかも、儲かれば、普及に弾みがついていく。便利であるとは操作が簡単だということです。それから儲かるとは、そういう技術が普及する必然があるということだと思います。そういうレベルになってこないと、いくら教育してもたぶんだめでしょう。コンピュータが何の役に立つかということですけれども、そもそもそれが社会の全員にとって便利であり、そして儲かる、そんな機械になるのかどうかというところがたぶん一番のポイントなのです。



野々垣元氏

## 情報伝達の責任性が問題

**野々垣**　先ほどのお話で、私なんかも、情報のリテラシーというのをいわゆる産業革命時代のリテラシーと同じ考え方で捉えることはたぶんできないということが、非常にはっきりあるんだと思うのです。つまり、全員に普及させれば国のステイタスも上がり、文化も上がり、それから産業も非常に発展するというような、そういうイメージがある。それで産業革命の時代というのは、ナショナリズムとも一体になった形でリテラシーというのが進んできたわけですけれども、いま橋爪先生がおっしゃったように、すでに消費社会に入っていて、個人個人が自分の欲求を満たしていくということが、基本的にできるような状況になってきているわけですね。ですから、可処分所得ももう十分にあって、そのお金をどうやって使うかによって自分自身の価値観を高めていくかという、そういう時代になってきてるわけですね。

ですから、そういう中で一人ひとりに、こっちだよ、こっちがいいんだよ、というふうに言っても、俺はこっちに行きたいんだというふうに、要するにもうマスからパーソナルな時代になってきてるわけですから、そこのところにたとえば教育というのを持ち込んでも、なかなか受け入れられない。まさに逆に使いやすさとかが問題で、コンピュータでいいますとヒューマン・インタフェースということになるんですが、インタフェースをよくしていくということのほうがはるかに重要で、いわゆるリテラシー問題、つまり産業革命時代的なリテラシー問題ならば、ヒューマン・インタフェースをよくすれば終わりじゃないか、つまりエンジニアリング的に解決すればいいんじゃないかというふうになってくるような気がするんですね。

でも、一方、井上先生が最初から提起されているような問題というのは、実は今度新たに発生してくる問題だと思うのです。つまり、情報というのが今度は誰でもがコピーをできるような状態になってくるわけですね。コンピュータの時代というのは、ともかくそのまま左から右にコピーができる。コピーということをすることの責任性といいますか、そういうようなことがあまりはっきりしない。コンピュータではともかくほとんど自分の負荷はゼロです。つまり、昔だったら写経するならば、ともかくお経を写さなきゃいけないというたいへんな労力をやる。それから本になってれば、資本主義社会だったら買えばいいんです。

けれども、でも、それでも自分で読まなきゃいけない。読んでそれなりに納得しないといけないという、そういうことがあるわけですけれども、情報時代になると、ほとんどそういうものが情報の形になってきて、それをまたたとえばキーワード抽出などといって、この文字列は楽しそうなことが書いてあるか、それともそうでないかみたいなものをキーワードで設定して、こういう単語がこれだけの頻度で出てきたら楽しそうだというので、それだったらみんなにばらまいちゃうとか、これは押さえようとか、または逆だとか、そういうことがコンピュータによってできてしまうような形になってきてるわけです。つまり、そういうような状態になってきたときに、情報をハンドリングするということの責任というのは一体どういうことなのかということがあると思うのですね。

先ほど報道機関のA社の問題をお話しになったんですが、やはりあれも非常に情報時代の特性が出てると思うのですね。つまり、オウムの情報というものを弁護士本人はある事実と、それから推測に基づいて、情報をつくっていたんですけれども、次にそれを取材した週刊誌の人たちがそれを週刊誌に書いていったわけです。その週刊誌に書いたものを見て、これは記事になるなと思って、A社の人が実際に、ワイドショーで取り上げるということをやった。

そこでもって、二段階、三段階ぐらいになってきたときに、問題は、情報をどう脚色するか、どう演出して見せて視聴率を稼ぐかというところに移っていくわけですね。つまり、内容そのものの非常に重要な社会性なりというものから、少しずつシフトが起こっていく。それを情報に携わってる人たちがそれぞれの役割でもって果たさざるを得ない。やはりテレビジョンというのはブロードキャスティングで視聴率を、稼がなきゃいけないという、言い方はおかしいですけれども、やはりそうでないとある意味では存在価値がないわけですね。そうするとそこのところの価値が内容の価値にある程度必然的に先行する部分が発生してくる。テレビではワイドショーとニュースが社会情報局ですか、それと報道局ということで中で分けてるというふうに言ってますけれども、いずれにしてもそういう形が情報をハンドリングするときの責任問題と密接に結びついているんだろうというふうに、私は思ってます。

ですから、コピーをするということの責任というのは、一体何なのかは、相当に大きな、これから考えていかなくてはいけない問題だろうと思うんです。

## 個人のリテラシーと社会的リテラシーの意味は

**井上**　野々垣さんの最初のお話の、産業化時代のリテラシーと現在の情報リテラシーの質が違うというお話、そこがもう一つ私にはよく見えないんですが。つまり、個人にとってリテラシーが役に立ったり、自分の生活を広げていったりすること、そしてまたリテラシーを獲得することによって個人がさまざまな情報の発信者になっていくという、そのことが新しい特色だとおっしゃったのかなと伺ったのですが、そのことは産業化時代、近代化の過程の中でのリテラシーも同様だと思うんですね。また同時に、個人個人がそういうさまざまな力を獲得していくということが、社会全体として見ると労働力のレベルを上げていくという意味で必要であったということもありますよね。

社会全体としてリテラシーの向上に意味があったと同時に、個人にとっても意味がある。かつ、そのリテラシーを獲得することによって、そういうリテラシーをつくり出した社会自体をまた変えていく力を個人が身につけていく。そういう意味ではリテラシーというものの持っている多様性といいますか、複雑性、それは近代化の過程におけるリテラシーの獲得も同じような両面性を持っていたと思うのです。

今の世界全体の中で見ると、読み書き能力の獲得がやはり同様の意味を持っていると思います。国際識字年とかいったことは、ある意味では、文字を持たない、独自の文化形態の中で生活できている人たちにとっては、よけいなことであるという側面ももちろんありつつ、かつ、ある種の世界を開いていく力にもなっていくという両面を持っていると思います。

けれど、そういういわゆる読み書き能力としてのリテラシーということと、それから現在問題になっている情報リテラシーと、それの持っている意味は、個人にとっても社会にとっても、非常に似ているように私には思えるのですが、質的に違うというのは、どんなふうなところですか？



## 変化したリテラシーコンセプト

**野々垣**　いや、価値とか意味とかというのは似てるかもしれませんが、要するに、方法とかが全く違ってしまってると思うのです。つまり、近代産業が始まったときにはすでに人間はともかく相当な文化を蓄積していたわけですね。で、それをどう広げるかということで、学校という制度をつくり、教師という制度をつくって、それでもって広げるということをやったわけです。

ところが、いまはどうでしょうか。そんなふうなことはできるかというと、もうコンピュータは日進月歩でどんどん変わっていきますね。そうすると先生は教えられるかというと、教えるような先生を教えるということすらできない。ものすごい勢いで変わっていますね。昨日教えたことが全く意味がないようなことがどんどん起こってます。ですから、そういう意味でほんとうの意味での教師というのは、一番先端で優れたソフトを書いてるとか、メディアをつくってる人たちそのものが教師になってるわけです。

つまり、産業の進歩そのものが波及効果を直接的に社会に及ぼしている。そういうふうになったときに、リテラシーというもののあり方そのものが従来のような形ではもうすでにあり得ない。これは非常にはっきりしてるんだと思うのです。

そうすると、では、やり方の問題として考えていけば解ける問題なのかということなんですが、これがまた非常に難しい問題を持っています。なぜかというと、リテラシーということで目指していることが、あなたはたとえばワープロのA社のもので、私はワープロのB社、私はパソコンのC社というふうにいろいろ変わってきて、しかもその一台も、同じものを買えばすむかという問題もあります。いまは「ウィンドウズ」が流行ってますので、全員「ウィンドウズ95」にすればリテラシーがパッと揃うかというと、これは揃わない。なぜかというと、その中にたくさんのパラメーターがありまして、それを全部、結局自分の都合のいいように変えるしかないんですね。それぞれ、一人ひとりの環境が違うので。そうするとそこでもって操作をしようとしたとき、ある人はボタンを二回押せばいいようになってる。ある人はボタンを一回押せばいいようになってる。これで同じことを喋ろうとすると、それだけで大変なことが起こってしまうということがあります。

つまり、いままでの産業の教育というのは、ある意味でいうと人間の自然とか身体とか、そういうものをベースにして構築すればよかったわけですね。ですけれども、これからのものというのはコンピュータというそのものを媒介にしないとできない。コンピュータというものが実はもういろいろなパラメーターが入っちゃっていて、そこですでに非常に発散的といいますか、それぞれに個性が出てくるような性質を持っている。その関係上、いわゆる従来のようなリテラシー・コンセプトを押しつけようとすると、たいへん難しい問題を引き起こすと私は思ってるんです。

## 「レタラシー」からバーチャル・リアリティに

**井上**　たしかにコンピュータというのはいままでの世界とだいぶ違う、新しい世界を開いてるわけですね。

**野々垣**　ええ、そうですね。

**井上**　自分がコンピュータをいじれないものですから、あまりイメージができなかったんですけど、いまのお話でちょっとわかってきました。

**野々垣**　これはコンピュータをほんとにやってる人たちの間の議論もたいへんにありまして。たとえば有名なMITのパパートという先生は（いまはもうMITにおられないんで

すけど)、コンピュータを教育に使おうということで一九七〇年代ぐらいからやっている。LOGOという言語をつくって普及させたりということをやっておられる方です。先ほどの橋爪先生のお話じゃないけど、識字という、いわゆるいままでのリテラシーは実は、彼らは「レタラシー」という言葉を使ってるんですが、レター、文字ですね。レタラシー、要するに文字を植えつけるという教育だった。けれども、これからのリテラシーはそうではなくて、たとえば四歳の女の子がキリンの食生活を知りたいといったとき、それをパパートは、一生懸命事典を調べて、そしたら事典だとかいろいろ調べることが楽しかったと。楽しくて、それでわかって教えようとしたんだけど、待てよ、こんなに楽しい思いをした自分の思いは四歳の女の子には伝えることができないと。これはおかしいじゃないかと。つまり、四歳の女の子も自分と一緒に楽しめる素地というのは十分あるはずだ。そういうことができるようにコンピュータはなったんじゃないかと。つまり、ともに学ぶとか、ともに楽しむとかいうことができるような形というものをこれからやっていかなきゃいけないんじゃないかということを、リテラシーということの中で言っていたんです。それは具体的な解決方法としてはバーチャル・リアリティ的なものをつくって、キリンが生活しているようなバーチャル・リアリティの空間をつくって、その中に四歳の女の子と自分が一緒に入ってインターラクションしたりいろいろすれば、そういう体験がともに楽しめるんじゃないかという、そういうかなり示唆的な話で、たいへん面白かったんですけど。

それはたしかにリテラシーなのかなあという気はするんですけれど、一方では、そのことを社会の基本的なニーズとして全部に広げるという、先ほどの教育システムというところに入っていったときにどうかというと、こがたいへん難しい問題です。実は彼自身がやってる仕事が、そういう制度の問題と、個人個人が楽しむという問題との矛盾をいまいへんに大きく持っているような感じがする、そんな気がするんですね。

## コンピュータはそんなに質的に違うのか

**井上**　コンピュータというのは日進月歩でどんどん進んでいて、先生も教えられないというふうにおっしゃいましたね。しかし、一つの機種を使えるようになった場合に、基本のところでの応用性というのはないのですか。コンピュータを使うということについて、ボタンを一つ押すか、二つ押すか、順序がどうかといった多少の違いはもちろんあると思いますが、そういうことは一つのコンピュータを使えるようになれば、ちょっとした応用問題でできることじゃないのですか。

むしろ基本的に、コンピュータというものはこういうことができるんだよ、基本的にはこういうことを操作すればいいんだよということを伝えることが、コンピュータ・リテラシーとしては基本であって、それ以上のことは、文字の場合と同様、自分で学んでいくということではないのですか。だから、それを考えると、コンピュータだからといってそんなに違わないんじゃないかと思うのですが、どうなんでしょうか。

それからバーチャル・リアリティを共通に体験するということについても、たしかに他のメディアに比べると、より現実感のある共有ということができるのかもしれませんが、しかし、お話を読み聞かせるとか、本を一緒に見るとか、写真を一緒に見るとかということによって、大人と子供と、あるいはある知識を持ってる人と持ってない人との対話もできるし、ある種の共有した感覚というものをつくり出すこともできますよね。

そう考えると、私なぜ素人から見ると、コンピュータってそんなに特別質の違うことができるようになってるのかなと疑問です。今までのいろいろなメディアの延長上に位置づけられるんじゃないかなと思うんですが、そうでもないですか。コンピュータはどのような世界を開いているのかというあたりを。



## 文字の歴史とコンピュータの歴史

**橋爪**　リテラシーのことで言いますと、文字とコンピュータはやはり違うのです。それは野々垣さんのおっしゃった通りなんです。どうしてかというと、まず文字は、近代になって文字の体系を普及させようと思ったときに、すでに二千年の歴史があった。文字は符号のシステムです。ですから、そこがネックになって情報が手に入らないのであれば、それは一刻も早く身につけたほうが本人のためでもあるし、社会の発展にも役立つ。だから、教育にはずみがつくのですね。

ところがコンピュータの場合、何をマスターすればコンピュータがわかったということになるかということが、十年単位、五年単位、二年単位、いや三カ月単位で変わっていくんです。ですから、教育がなかなか成り立たない。自然に広まっていくのを待つしかないということになります。で、時間がたてばたつほどコンピュータの操作は簡単になっていく。ひと昔前に苦労して身につけた操作が、陳腐化して役に立たなくなってしまう。そういうことなら、普通の人の最も合理的な行動は、何もしないで待つことです(笑)。

**井上**　そうですね(笑)。

**橋爪**　ということになります。ですから、コンピュータ・リテラシーを高めていくための教育はあり得ないことになるんですね。

でも、日進月歩の技術を何が支えているかというと、古いシステムを努力して身につけ、仕事に使い、自分で使いこなし、そしてその不具合を見つけて、不便だなあ、もっと何とかならないかなあとみんなで思う。そこで新製品を出すと爆発的に売れる。こういうプロセスの繰り返しですよね。だから、コンピュータはつねに過渡期にあって、コンピュータに不満を覚えながらも、業務上しょうがない、ないとどうしようもないので、一生懸命努力して身につけてる人が大勢いるということです。たとえばいま問題になっている中高年のサラリーマンなんかで言えば、たしかに五年、十年すればそんなに苦労しないで自分でも使いこなせる機械が出るに決まっている。でも、今日のいま生き残るために、どうしてもこの機械をマスターしなくちゃいけない。ここで過渡的ではあれ、あるリテラシーを身につけなければならない。いつでもそういうふうにしてこの問題は表れてきてるんじゃないでしょうか。

それで、リテラシーの極限は、コンピュータの場合、リテラシーがいらなくなるということだと思います。普通に言葉を使いこなしてさえいれば、コンピュータに話しかけて、コンピュータが勝手に考えて応答してくれる。キーボードもない。そういうふうな世界になるということが、コンピュータの理想でしょう。コンピュータには潜在的にそういう能力があると思います。だけど、いろいろな理由があって、そこまでいかない。現在だったらキーボードを使ってプログラムを入力してやらなきゃいけない、あるいはあるソフトの上でアイコンをクリックしたり、いろんな不具合が起こるたびにマニュアルを見なければいけないようになってるわけで、その敷居はやはりかなり高い。日本人全体の中であるソフトを使える人の割合で見れば、どんなにいいソフトでも一〇パーセント。だめなソフトなら一パーセントか〇・一パーセントになってしまうわけです。つまり、非常に敷居が高いということを表していると思いますね。

**野々垣**　それからもう一つ、いまおっしゃった中で、潜在的でしかない、本質的に潜在的なんだと私は思ってます。これはなぜかというと、結局人間がそれまでやってきた成果を全部、最終的にコンピュータに入れざるを得ない。そういう欲求を持ってますので、そうすると、そこのところですでに矛盾があるわけですよね。つまり入れようとしたら、それもまた新たなものを生み出してしまいますから、そこでまた入れなきゃいけない次の欲求を生み出しますので、そこのところに本質的な問題がはらまれていると思うんです。

ですから、これは音楽の世界ですけれども、

いま音楽の世界なんていうのは完全にコンピュータなしでは語れないんですよね。自然の、いままで人類が培ってきた地球上で生み出せる音というのは、当然それなりにあるわけですけれど、そうではない音とか、リズムとか、それから音の出方、音場とかいろいろなものがあるんですが、そういうものはもうコンピュータだったらできるようになってきている。要するに自然にないものすら生み出してる時代なんですね。

ところが、では、それに限界があるかというと、次々と新しいことが出てくるわけですよね。ですから、楽器としてはコンピュータは何でもできる。そういう意味では普遍的な楽器なんですけど、普遍的な楽器だから、普遍的な楽器としての一つのはっきりしたモデルがあるかというと、実はモデルがないということが普遍性を保証しています。

## コンピュータリテラシー時代の倫理が問題

**橋爪**　先ほどの報道機関の問題にちょっと戻りますが、私なりに整理しますと、あの問題はマスメディアの倫理の問題である。マスメディアは二十世紀に誕生したものですけれども、十九世紀のジャーナリズムの倫理を継承しているわけです。ジャーナリストはプロの集団ですから、情報を扱うプロの集団が当然踏まえていかなきゃいけない行動倫理があって、それをどういうわけか日本のマスメディアがきちんと身につけてなかったという話なんですね、突き詰めますと。

情報リテラシーに関して言いますと、コンピュータが出現して以降の人間のコミュニケーションの形態は、たぶんマスメディアを中心とするシステムから、中心のない、多方向のネットワークに、だんだん置き換わっていく。つまるところ、プロの集団がいなくなるんです。プロの集団がいなくなって、一人ひとりがそのネットワークにふさわしい行動様式を身につけなきゃいけない。これはリテラシーとは言いにくい。リテラシーがあっても悪いことをする人はいるわけで、リテラシーがあり、なおかつ適切な行動をすべきこと、これはエシックス、倫理だと思いますけれど、そういう問題もリテラシーの延長上で私たちに突きつけられています。

今回の報道機関の問題を見てけしからんと、みんな思ったと思いますが、では、自分がコンピュータを使ってプロフェッショナルたちのかわりに実際に情報を自分で扱うようになった場合に、適切に行動できるかといえば、それを身につけるチャンスは必ずしもないわけですから、場合によっては、きっと不適切な行動をする人がたくさん出てくるだろうと思います。こういう問題もまさに人ごとではなく、自分たちの問題になってきている時代だと思うわけです。

**野々垣**　コンピュータ側から補足といいますか、別な観点で申し上げますと、今回のお話のベースにはたぶんマルチメディア時代とかそういうことで、いわゆる読み書きそろばんというリテラシーから、そうじゃなくて、音声とか音楽とか、それから画像とか映像とか、そういうものまで駆使できるような能力を身につけるべきであるというふうな、ある意味でいうとオプセッション的なものがあるような気がするんです。マルチメディア時代だからそういうものを駆使できなければいけないという。

ところが、よく考えてみると、マルチメディアというものの音楽とか、映像というものは、コミュニケーションという意味で、結局何を伝達しようとしているのかという、そういうことの本質というのが議論されないままに、いわゆる五感のどこに働きかけるかということだけを問題にしているような気がするんです。

コミュニケーションということでいうと、伝えようとする内容の信憑性を保証するものというのは、その内容そのものの正確さ、それから適切な量とか、これは言語学とか語用論でいろいろ研究されていますが、そういうテキストのあり方なり何なりでもって議論する部分と、それから誰が伝えようとしているかという、その人格ですね。

それによって信憑を得て、あの人が言ってるなら、とりあえずわからなくても信じましょうとかです。

## モードが主導するマルチメディア時代

**野々垣**　あともう一つ、口においしいといいますか、モードといいますか、まあ、ファッションのモードとか同じような感じで、気持ちいいとか、抵抗感がないとか、そういうようなおそらく三種類ぐらいのものによって、情報というものを受け入れるときに規定されているような気がするんです。

そうしたときに、たとえばテレビのことを考えてみますと、今回のオウム問題みたいに、ターゲットになったのは、弁護士本人がターゲットになった。ところが、たとえば新聞とか週刊誌とかですと、新聞社なり週刊誌の〝社〟がターゲットになってる。つまり、人格性というものをテレビとしては見られていないんですね。むしろ情報を発信している一番のもとになっている弁護士本人がターゲットになってしまった。私はそう見てるわけなんですけども。つまり、完全に情報を誰が発信しているかということのシフトが起こっているように思うのです。

ですから、コンピュータの場合のマルチメディアといったときに、まず映像というのは端的にいいますと、ムードを醸し出すために非常に役に立ってるというのが多いんです。それに対して音声、特に声なんですが、声というのは非常に人格を表している。

ノンバーバルのコミュニケーションを研究されてる方々がいて、コミュニケーションの中でどの情報を一番多く受け取ってるかという研究を、マーベリアン(Mehrberian)という人がしたのがあります。そうすると全体を百パーセント受け取っているとすると、声で喋ってる内容というのは七パーセントぐらいしかない。で、五五パーセントの情報は顔色から入っている。残りの情報が声の抑揚とそのキャラクターから入ってくると。つまり、声というのが人格性を表していると私は思ってるわけです。で、顔というのは映像といいますか、つまりムードを表して、いつもニコニコしていれば話しやすい、そういうことを表していて、テキストなり声の内容そのものというのは非常に小さいパーセントを表していると。これは通常の談話のケースですから、今日の、この座談会のように目的を明確に持ったような場合には、もちろん言ってる内容が非常に重要ですから、ここではわれわれお互いに顔を見合っているなんていうことでは全然ないんですけど、通常の談話ではそういうことなんだということが研究されているわけです。

つまり、そういう場を形成したときに、場を主導で導いている要因が何なのか。そのときテレビはそういうコンセンサスをつくるようなことが主導のモードになっていて、それに対して新聞なり何なりはそうじゃなくて、内容を述べることが主要な関心事になっている。そこに大きな違いがあるということなんですね。ですから、そういうことをきちっと研究していく必要があって、ネットワーク、インターネットなりで情報を発信するというときには、それはどういう場でもって発信をしているのか。これはどういう人たちがギャラリーになっているのか。それによってどういう場が成立しているのかということをわきまえてやらないと、非常に大きな問題を起こすと思います。そういうことがますますはっきりしてきているような気がするんです。

**井上**　その場合、コンピュータの場合はどういう特徴があるわけですか。つまり、個性というものがなくなっちゃうのかなという感じもするんですけど。

**野々垣**　そうですね。おっしゃる通りで、長い間企業の中での電子メールでのコミュニケーションを研究していた、アメリカのカーネギー・メロン大学のスプロール(Sproull)という人とかキースラー(Kiesler)という人がいるんですが、それはだいたい五年ぐらい前の研究ですけれども、電子メールでは情報と

いうのは、非常に内容濃く発信されるんだけれども、匿名性が非常に高くなる。それからともかく何か言いたいというのが非常に多くなります。それからテキストの中身で上司と目下との差別がなくなっていきますと。そういうことが観測されると言います。

まあ、実はもっとたくさん、十項目ぐらい研究された結果があるんですが、大きく言いますと、そういうことです。要するに人物性というのを社会的に保証しているような門地

## リテラシー格差を是正するために

**井上**　コンピュータを通じて人格性というものがなくなって、ある種匿名の人々によって情報が飛び交う時に、たしかにコンピュータのネットワークに参加している人同士の中でのある種共有された前提があって、その中で誰が発信しようが、それはその人の個性というのはなくなって、共通の言語が飛び交うことになっていくんだと思うんです。けれども、私などのようにコンピュータに近づかない人たちのことを考えると、近づかない人、コンピュータを利用しない人にとっては、コンピュータの中でつくられる空間は閉じられてますよね。その閉じられた世界の中から全く外されていってしまうという気がするんですね。

テレビにしても、あるいは印刷メディアにしても、とにかくある種の顔が見えて、誰が発信していて、誰が何を言っているかがわかる。その場合には、メッセージの偏りとか、誰が排除されているのかといったことが、目に見える形でわかりますよね。だから、批判もできる。私たちはそうしたメディアの偏りや排除を問題にしてきたわけですが。しかし、目に見えない、顔が見えない形である種の共通の土俵ができて、あたかもそれが一般的、普遍的な何かかのように情報が飛び交っていくときに、そこから外れた人たちは、全く外れているということ自体も気付かれなくなってしまうんじゃないかという、そんな気がするんですね。

だから、実はコンピュータを使ってお互いに交信されている中身というのは、もしかしたら人々の生活の中のほんの一部の関心に基づく議論だけかもしれない。にもかかわらず、そういう偏りが見えなくなってしまって、そこだけがどんどん発達していっちゃうという、その怖さみたいなのを感じるんですね。

逆にいうと、私たち自身がコンピュータというものを、いずれたいして難しい技術を身につけなくても誰でも使える時代になるだろうと期待して、その日を待ってるという、そういう姿勢ではやはりだめなので、むしろコンピュータの中にリテラシーを身につけて積極的に参加することで、コンピュータを通じての通信などで、たとえば女性のように、そういうものから遠ざけられている人たちの意思とか欲望とかというものをそこに反映させるような形で情報の交流をしていかないと、遠ざけられた人はますます遠ざけられていって、そこの距離が広がってしまうのではないかなと、そんなことも考えます。

**野々垣**　いまのお話に対しては、正当にお答えするために、まず、わりにネットワークを一生懸命やっている人は全く反対に、そういう人たちに対して一生懸命に真摯な態度で受け入れようとしますし、そういう意見だとか、それからその人が持ってるだろう環境とかそういうものを推測して、その人が扱えるような情報とか、読めるような形とか、そういうものを提供するような努力をする人が非常に多いことをはっきりと申し上げておかなきゃいけないと思います。

それからもう一つ、そういう意味ではたとえば非常に面白い本は、『バーチャル・コミュニティ』という本をハワード・ラインゴールドという人が書いて、これはついこの間でしたか、たぶん日本でも出たんですが、そんな本があります。

ただ、私もネットワークをもう八年ぐらいずっとやってますけれども、感じることは、その上で、やはり日本とアメリカの差というのがあるなあということを非常に感じるんです。つまり日本は、ニフティだとかPCVANだとかいくつかあって、そういうネットワークの上にフォーラムという場があるんですが、どうしてもそういうところで展開される議論が、わからないとか、これは私はこう思ってるんだとかということをずっと主張し続けることが非常に苦痛になるような、そういうことがわりに多いんですね。そういうところが日本とアメリカの発信の仕方の違い、何か言うときも、たとえば「普通こんなふうに思うと思うんですが」という書き方をするんですよね。そうすると、僕らネットをやってる人間は、自分の言葉で喋ってほしいと、こう言うわけです。でも、喋れないんですね、これが。要するに、「私はこう思います」と書けないんですね。だから、「こんなふうに思うのが普通だと思うんですが」という言い方をするんですよね。そうするとやはりだんだん、一生懸命入ってほしいと思うんだけれども、そういうところがある意味でいうと阻害要因にもなりますし、それが場の雰囲気を微妙に変えてるふうが出てきてますね。

**井上**　それは日本人が直截に自己を表現したら、自己を主張することを避けて、婉曲話法を使うということですか。それとも英語を使わねばならないことからくる問題ですか。あるいは何かシステム上の、仕組みの問題があるんですか。

**野々垣**　あ、それはないです。仕組みはアメリカ、日本全く同じだと思っていただいて結構です。たしかに若干技術が向こうのほうが進んでるとか、そういう面はありますが、基本的には全く同じだと思っていいと思います。ですから、むしろ文化的な差というものが非常に大きく出てるというふうに思いますね。

## 情報の精選が最終的課題では

**橋爪**　先ほどの問題――コンピュータのネットワークに入っていかない人間は排除されるのではないか。もうその通りで、そこに明確な線があります。ですから、ネットワークの中の人がいくら善意で歓迎しようと思っても、要するに入ってきてから歓迎するしかないのであって、入ってこない人についてはそもそも歓迎のしようがない。そういう意味で、コンピュータを買わない限り、どうしようもない問題で、そこに線があるんですね。

ですから、コンピュータ・リテラシーを課題にする前に、そもそも公共で使えるコンピュータをたくさん図書館とか学校に入れて、それから線を引いてあげないといけない。こういうインフラ投資を国内でも、それから国際的に――たぶん、第三世界が圧倒的にそういう点では遅れるわけですから、そうしたところで――必要になってくるというのが第一点です。

それからネットワークの中身ですが、通信コストがどんどん安くなって、ほとんどタダになるわけです。で、コンピュータも安くなったとしましょう。そうすると誰でもその上で発言できるようになるわけで、そういう点ではたいへん民主的ですが、するとどうなるかというと、どうでもいいような情報が非常に増えてくるわけです。

私は、あるコンテストの審査員をやりました。そのコンテストというのは何かエッセイを書いたり、絵をつけたりするんですけれど、必ず電子メールで投稿することになっていて、一応ネットワークを前提にしているんですね。そうすると私が読んだ感じでは、ほとんどゴミみたいなものばかりです。投稿するコストがあまりに安いので、そういうのが増えちゃうんですね。通信コストが安くなっても、コストは実はあるわけです。つまり時間です。そういうゴミのような情報を三時間、五時間

と延々と読み続ける人はいないわけですね。自分にとって有用な情報があるかどうかが問題です。時間に見合っただけの見返りが得られるのかどうかということが、情報の飛び交う中心のないネットワークにとっては一番大きな障害になります。

マスメディアと比較してみますと、マスメディアの場合、情報を送信するのに巨大な資本がかかります。そこでその資本とリスクを負担する人がいて、一部はスポンサーが負担しているのですけれども、最終的にはジャーナリストとか編集者という人がいて、その人たちが情報を厳選して、視聴率がとれる、多くの人に受け入れられる情報を選んでいた。だから、あるレベルのクォリティーを保証できたんですけれども、そのシステムが崩れます。ですから、もう私たちがもろに情報の選択コストをひっかぶることになる。

つまるところ、その先はどうなるかというと、情報選択を代行する人たちがネットワーク上に現れてくると思います。「今週のよい情報」みたいなものをセレクトする。そういうグループが出てきますね。で、彼らがステーションを店開きしていて、そこにアクセスすれば短時間でよい情報が得られる。さらにその上が出てきます。「今週のよい情報」を出してくるステーションの中でどれが一番信頼に値するかという情報を流す。こういう権威づけのネットワークが建設されるだろうと思います。いまはほとんどないけれど、自ずからこれは必ずつくられていくというふうに思います。

**野々垣**　コンピュータの機能自身でそういうことをやる機能があるんですね。BBS（掲示板）にいろいろな人たちがどんどん書き込みをできるんですが、書き込みをする。その書き込みをタイトルだけで読むと、何人が読んだかという数が出るんです。それが同時に表示される。そうすると、コストがかかるのはいやだから、大勢が読んだものだけを読むようになるわけですね、まさに。ですから、それでもってどんどんふるいがかかるようになります。

それはテレビでも最近同じですね。「お父さんのためのワイドショー講座」とか（笑）、そういうのがあって、この事件はワイドショーで何時間放映されたと。ですから、ある意味でいうと、まあ、どっちが先かはわかりませんが、価値のふるいにかけるシステムそのものをシステム化するという、そういう形にどんどんシステムが変わっていってるというのは明らかなことです。

**井上**　でも、多くの人が使ったから、良い、必要な情報とも限らないですね。

**野々垣**　ええ、まさにそうなんです。ですから、それは最初のタイトルだけが一覧表に出るんです。そうするとそこでみんなのウケを狙うために、キャッチをいろいろ考えるんです。中身はくだらなくても、キャッチ一行で頑張るんですね。そういう派生的な努力がどんどんされるようになるんですね。

**井上**　それは先ほど話されたような、情報を発信する側の倫理という問題に関わりますね。メディアに関していえば、やはり視聴率をとるとか、広告効果を上げるとかいう、営利ということが第一目標になった上での報道であったり、番組づくりであったりする。私は日本の場合は営利主義に対する歯止めが非常に他国に比べて特に弱いんじゃないかと思います。ジャーナリズムの倫理以上に、利潤追及のほうが優先していると思うのです。コンピュータの場にそれが移ってきたときに、やはり今おっしゃったようなウケを狙うというか、あるいはそこでいろいろな宣伝的な要素というものが入ってきたときに、その効果を狙うということが、第一の関心になって、中身の伝達そのものは二義的になっていくという心配はないのですか。

**野々垣**　それは明らかにあります。

**井上**　プロフェッショナルがメディアをつくる、それを職業とする人にとっては当然いろいろジレンマがあると思うんです。しかし、各自がみんな発信者になってきたとき、そのジレンマをあまり感じずに、ほとんど無意識のうちにまずウケを狙うというふうに、逆になっていっちゃうんじゃないかなという気もするんですけれど。

**野々垣**　ですから、それが先ほどのコピーの話はまさにそうなわけですね。つまり、自分のポジションを明らかにしないままに、平気



で面白い情報があったという内容に対するディストリビューションが起こるわけです。それでまさに橋爪先生がおっしゃるように、ワッと山のようなメールが飛び込んでくるんですね。まあ、ほんとに親しい友達だったら、こんなの送るなよ、と言えますけどね。そうでなければともかく黙ってメールを捨てるしかないんですね。もうじっと我慢して捨てるという、そういうことになるんですね。

**井上**　だけど、情報を受信して、それを選択して使いこなすための時間がまた、ものすごくかかるようになるんじゃないですか。

## 情報の取捨選択は時とともに上達する

**野々垣**　そうですね。

**井上**　私、インターネットをやってみようかなあという気が、この頃ちょっとは出てきてるんですけれど。

**野々垣**　あ、それは失わないでくださいよ。今日のお話で失ってしまいそうな気が……（笑）。

**井上**　今、日本経済は建設業では経済を開発できなくなってるから、そういう情報機器を普及させることで、経済を再興しようという、そういう方向づけがあるのかなあと、ちょっと勘繰ってもいるんですけれど。最近情報機器の導入には文部省も比較的に助成金を出す傾向があるんです。だから、あちこちの大学が、結構大金を捻出して情報システムを設備しようとしているわけです。そういう状況の中で、やはりちょっといじってみようかなという気持ちをもつ人が増えてきています。

たとえばフェミニズムとか女性学に関しての外国の文献情報とか、会議の情報とかがサッと出てきたらいいだろうなあとは思います。昨年の北京女性会議でもそういうインターネットを通じての女性のネットワーク化ということがかなり言われましたし、そういう努力もされていました。

そういうのを見ると、私もネットワークに入っていろいろな情報を得たいし、また日本からも発信したいなという気持ちが出てきます。しかし、他方で迷ってるのは、そういう情報が次々に押し寄せてきたときに、一体自分にその処理能力があるだろうかということが、すごく心配なんです。今でさえ印刷物の情報だけだって、毎日それのために使う時間って大変なんですよね。で、自分のやりたい仕事というのかな、そういうことに使う時間がだんだん減ってるような気がするんです。まとまった時間がとれなくなって、郵便物の整理だけで結構時間をとられてるという現状があるわけですね。そういうときにさらにコンピュータを通じての情報が入ってきたら、私は一日中その情報の処理だけに追われてしまうんじゃないかなという、そういう心配も一方でしています。だから、まだ迷っていて、コンピュータを買ったり、いじったりしてないんですけれど、その辺はどうなっていくんでしょうね。使ってらっしゃる方々はそういうことをうまく仕分けていく技術というのを身につけておられるのでしょうか。

**野々垣**　そういう意味でいうと、情報化社会というのはやはり新しい社会が始まりつつあると、私は実は思っています。それは、誰もあまり明確な像を描けてないし、たとえば今までの産業社会から情報社会に行くときに、部分的にバッとあるところが発展をする。ともかく情報というのは確実に社会全般に及びますけれども、結局、波及に関しては、あるところはすごく波及するけれども、あるところはあとでしか波及しないとか、そういう問題がいろいろ起こるんだろうと思うのです。そうすると、そういう真っただ中に置かれた人はたまたま進んでしまう。そうでない人はそうでもないという、そういうことなんだろうと、私は単純に考えたほうがいいんじゃないかと思います。

それは近代社会が成立する前の、中世の共同体から人間が離れて都市をつくるというふうになったときに、都市に出てくる、出てこないというような問題と、結局同じようなことがあると思うのです。近くに都市があって、

だから出ていくということもあるでしょうし、そうじゃない人たちはずっと古い共同体を守ってるというようなことがある。それが今度は意識とか仕事とかそういう形で起こっていると、ある意味では思っています。それと別に、技術というのはある意味では確実に進んでる。ただ、それが見えなかったりするということがあるわけですね。

ですから、いまのフェミニズムにしろ、おっしゃったようなキーワードで、たとえば世界中の文献を自分が主体的に出かけていって集めることは、いま非常に簡単にできます。少なくともインターネットに乗っかってる情報は、そういうものが何万件ありますということを、キーワードをいくつか入れて取り出すことは非常に簡単にできます。それはネットワークに自分が主体的に働きかけるという。その主体的に働きかけるときに、働きかけ方をどんどん、コストを上げていけば、より精細に、たとえばキーワードをただ単に「フェミニズム」と入れると一万件出てくるかもしれないけれども、それにさらに細かいキーワードを入れていけば、百件くらいまで絞れるかもしれません。そういう自分の努力に見合ったようなことをできるようなシステムというのは、すごくできていまして、しかもそういうキーワードを登録しておくと、新しいのが登録されたら通知してくれるとか、そういうことはできるようにはなってるわけです。ですから、そういうふうに主体的に働きかければ利益が得られるようなシステムは、少しずつ出てきていて、あまりそうネガティブに考える必要はないと思います。

ただ、一方で、ワーッと外から来る情報というのがありますね。それに対してどう対応するのかという。まあ、結局これも責任という、リスポンシビリティーというのはリスポンスから来てるわけですから、来たものに対して応答するという。僕らは倫理観としては非常に古い倫理観を持ってますから、やはり来たものに対して、何でも読んできちんと返事をしなきゃいけないという気持ちを持っていて、おっしゃる通り、何としても読もうとするんですね。でも、最近はもう諦めて、私はまず人で選択をするわけですね。この人とはこういう関係にあるから、こういうメッセージが来るのは読まなきゃいけないとか、これはそうではないんだとか、そういう振り分けをまずします。それをあとロボットに教えておくと、自動的にやってくれるわけです。

**井上**　ああ、そういう取捨選択をしてくれるわけですか。

**野々垣**　ええ。急ぐものだけそういうふうに取捨選択をさせるということは、いまロボットで簡単にできるわけですね。ですから、そのあとでさらにまだ、やはりそうはいいながら、内容というか、タイトルなりを見て、それで興味、あるいは関係しそうなことはちょっと見ておこうかという。そういう二段階、三段階構えで、実際にはいまネットワークとは付き合ってます。

**井上**　一日どのくらいの時間を使って？

**野々垣**　ですから、そんなに使わないというポリシーで、あとはどこでも見れるというのがポイントなんですね。だから、どこでも見れるようにしなければいけない。うちに帰ってきて自分のパソコンの前に座ったりとか、会社のパソコンの前に座ったりとかというので初めて可能になるというのだと、ものすごく制約を受けますね。ですから、それがネットワークのいいところで、時間を非常にリアルに使えるということがあるので、そういうやり方をしてます。で、全体ではどうでしょうね、一時間かけてませんね。ただ、読んで書いてという、この書いてという時間まで入れますと、もちろん一時間以上必ずかけてます。でも、それは私はネットワークで仕事をしてますから、明らかに仕事の一部なんです。

## 社会的アクセスが困難な人にとってはメリット

**橋爪**　ネットワークに、加入することのメリット、デメリットですが、従来だったら資本投下をして利潤を上げることができる、そういう人たちがメリットを感じたのでしょうけ



れど、これからは違う。社会と接触するチャンスがそれ以外にあまりない人たち、老人とか病院にいる人たちとか、あるいは物理的に家庭に拘束されちゃってる主婦の人たちとか、そういう従来の社会的ネットワークから外れていた人たちは、コンピュータ・ネットワークに入ることで大きな利益を得る可能性があると思うのです。たとえば北京女性会議でネットワークづくりが強調されたということでしたが、世界規模で女性がそれだけの情報通信の枠を独自に（インターネット抜きで）こしらえようと思ったら、どれだけのコストがかかることか。まず行き来をして顔見知りになって、それから手紙を出したり、事務所を借りたり、たいへんな騒ぎです。そういうことが全部、もうすでに敷かれてある線の中で連絡を取り合うだけでできるという点が、たいへんな利点で、そこから大きな利益を得る人たちは、たぶん潜在的にはたくさんいるだろうと思います。

要するに、そこで何をするかなんですね。無目的に入っていってもコストがかかるばかりである。そのコストを十分回収できるだけのしっかりした目的があれば必ず利益になるというレベルまで、技術は進んでいると思います。この方向は今後もどんどん進んでいくだろうと思います。

だから、政府をはじめとして公共団体の義務は、要するに通信料金を安くすることです。そのために独占企業があるなら解体して、線が足りないなら敷いて、昔、鉄道や電線を引いたように、どういう技術になるかわからないけど、たぶん光ファイバーだとすれば、そういうものをどんどん敷いて、少なくとも誰でも平等にアクセスできるようにその権利は保証していく。そういう展望が、もうそこまでいま来てるんじゃないでしょうか。

## 使い手間のギャップを埋めること

**井上**　平等にみんながアクセスできるような事態にまで現在来ているというお話なんですが、本当に技術的にはそこまで来ているのかなあと思いつつ、他方で、実際にはそれにアクセスできない人たちがかなり多数いるという現状を見るべきではないかと思うんですね。たしかに家庭にいる主婦にしても、年老いた人にしても、障害を持つ人にしても、そういう人たちがコンピュータを使うことによって他の世界に繋がりができていくという、そういう可能性をコンピュータは持っていると思います。その意味では、ある種の平等化という可能性を秘めているわけですが、ただ、それはあくまでも可能性としてあるということにすぎない。しかし、現実にはそういう道具自体をまだ買えないし、使えない人たちが圧倒的に多いという状況もあるわけです。そして使えない人と使える人との間のギャップが非常に大きいときに、そこをどうやって埋めていくのかということをいまは考えるべきなんだと思うんです。そう考えると、私は、通信費を安くするということは、機械を持ってる人がますます便利になるというだけであって、持ってない人は逆に全然ありがた味がない。むしろ、機械自体を安くするということや、公共機関にたくさんコンピュータを置くことや、また公共機関まで出かけられない人たちが自宅で使えるような、そういうサービスが本当は必要じゃないかと思います。

ある意味では可能性は非常にあるわけですから、その可能性を現実化するための手立てをもっと真剣に考える必要があると思います。

## ネットワークが進んで体面対話が難しくなる人も

**野々垣**　いまのお二方のお話のベースは、コンピュータをやってる側として申しますと、異文化交流といいますか、そんな感じの言葉で言うのが正しいような気がするんです。

最近、異文化交流というのをコンピュータの世界でも研究しなければいけないということを盛んに言われてまして、コラボレーションとか、そういうようなことが出てきてるわけです。要するにコンピュータなりメディアなり、あらゆるものが一人ではできなくなってきている。つまり、ペンと紙さえあれば一人でできるという自覚というのが、たいへんに厳しい状況になってきている。そういう意味で、いわゆる個人主義ではない地平が見えてきてるかなと思うんですけれども、そのための技術というのをこれから開発していかなくてはということです。

実はここにお持ちしたんですが、これは『めいたんていピッキーホームズ』というCD－ROMです。これは実は京都工芸繊維大の吉田先生という方がお子さんと一緒になってつくったCD－ROMなんですね。私なんかもデザインで一緒になって参加してるんです。父親と子供とのコミュニケーションというのも明らかに異文化交流なんだという考え方を、むしろ積極的に吉田先生はされています。世代が違うし、それから使うコンピュータも、もともと使いたいバックグラウンドも違うということで。それで父親はいつも家にいなくて、コミュニケーションする機会がない。うちに帰ったときには子供はもう寝ている。そのためにうちの中で親子ネットワークをつくって、そしてコミュニケーションを図るというところから始まって、こういう作品を共同でつくるということをやりました。アレックスさんとメアリーさんという、小学校六年と四年生の二人のお子さんがつくったんですが、これを一緒につくる前にどういうテーマでつくろうかというのを、ネットワークを使ってみんなでワイワイやりまして、それで決めたんですね。それができて、実はこのお子さんたちと初めて顔を合わせたのは先週の木曜日ですか。これをつくり出してからもう三年ぐらいたってるんですけど、全然顔を合わせなかった。

ところが、顔を合わせましたら、やはり二人とも全然喋れないんですね。ネットワークでは私にメールをくれてたんですが。で、私の名前はノンちゃんといって、この二人はアレックスとメアリーというんですけど。で、あとからまたメールが来ましてね、「ノンちゃんてのっぽだね」とか、「いつもニコニコ笑ってた」とか、そういうメールが来て、またすごく楽しかったんですけどね。現実とネットワークとの落差というのをこのときたぶん初めて経験したわけですね。うちで父親とやってるときには、落差は多少あっても、しょっちゅうやってますから、あまり感じないんでしょうけど、ネットワークの中では明らかに、初めてそういう経験をしたわけですね。やはりそういう現実とネットワークというのをいかに融合させていくかということがとても重要なんだと思うんですね。

先週の木曜日には僕なんかが中心になって、その子たちだけでなく、われわれの子供も連れていって、ワイワイ、ガヤガヤ、初めてのオフラインパーティということをやったんですが。結局、情報と肌で接する、情報もコミュニケーション、コンタクトだと思うのです。それから現実のところでも接する、コンタクトがあるわけですね。でも、それはかなり質が違う。それをうまくインテグレートするようなことが必要になってくる。それは個人の心がけとしてもそうだし、それからネットワークの技術でも、そういうものも合わせてやっていかなきゃいけないなというふうに思っております。

コンピュータはマウスでクリックするということですから、言葉で喋るのとか本を読むのとは全然違う、読むのが行動で、マウスでクリックするのだと行動ではないというふうに思いがちなんですが、私はそうではなくて、クリックするのもすべて行動なんだと思います。コンピュータでアクセスするのも、あらゆることがすべて、スピーチ・アクト、言語行為論というのがあるんですが、私はむしろコンピュータの操作、あるいは記号の操作というのも、あらゆるものが行動なんだと思います。そういうベースに立ち返って、サイエンティフィックな面もエンジニアリング的な面も、やはりコンピュータをやる側としては改めて研究なり開発なりをしていかなくてはいけない時代になってきたんだろうと思っています。



**井上**　私は今のお話を聞いて、なるほどと思いました。

情報の世界というのは、人間の身体を持った存在というようなものからどんどん遠ざかってしまうような気がして、そこを何とか繋げる方法も見出していかなくてはいけないと感じました。

**司会**　課題が残ったところで、時間になって残念ですが、今日は第一回目です。また続けて討論をいたしますので、どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

（一九九六年四月三日）

## 出席者略歴

**野々垣元**（ののがきはじめ）
東京大学理学部物理学科修士課程修了、同年、富士通㈱入社。ＦＡＣＯＭ230シリーズ、同Ｍシリーズ、Ｋシリーズなどの言語処理プログラム、オペレーティングシステムなどのソフトウェアの開発に携わる。情報社会をシステム的に支援するコンセプト＝ＮＥＴＴＯＷＮ の開発、ヒューマンインタフェース・アーキテクチャに関する国家プロジェクトＦＲＩＥＮＤ21の推進母体、(財) パーソナル情報環境協会ＦＲＩＥＮＤ21研究センター次長。

**井上輝子**（いのうえてるこ）
東京大学文学部卒業、同大学院社会学研究科博士課程修了後、立教大学法学部助手を経て、和光大学教員。女性学の研究に従事。「女性とメディア」研究。現代日本女性学会代表幹事。
（主著）「女性とその周辺」「女性雑誌を解読する」「女性学への招待」「メディア・セクシズム」

**橋爪大三郎**（はしづめだいさぶろう）
東京大学社会学研究科博士課程単位取得退学。東京工業大学大学院価値システム専攻教授。理論社会学専攻。
（主著）「橋爪大三郎コレクション」（全三巻）「性愛論」「はじめての構造主義」「言語ゲームと社会理論」「仏教の言説戦略」「現代思想はいま何を考えればよいのか」「冒険としての社会科学」「民主主義は最高の政治制度である」「社会がわかる本」「崔健――激動中国のスーパースター」「橋爪大三郎の社会学講義」
（共著）「自分を活かす思想／社会を生きる思想」「小室直樹の学問と思想」「電脳福祉論」「僕の憲法草案」「大学は変わります」